



1 瑇瑁螺鈿八角箱(蓋部分)

瑠璃螺鈿八角箱(蓋部分)

瑠璃螺鈿八角箱は、明治二八年六月御物整理掛の手により残材を蒐輯して復元修理を受けたものであり、当時残材の未発見部分については補作されている。

その後発見された残材についての調査に際し、この八角箱の瑠璃・螺鈿部の新旧を尋ねる必要が生じた。今図版にみる部分は、蓋甲面の一部を原寸大にしたものであり、これにより瑠璃・螺鈿の新旧の違いの凡そを述べようと思うのである。

地となる瑠璃の旧物は、蓮華に乗る雌の鴛鴦周辺と左区の地部、円圈内の右下、左上方にあり、暗褐色に見えている。その部分は、他に比べて斑文による明暗の差が明らかでなく、黄斑(透明)部に鈍い濁りがみられる。これは裏面に塗られた黄土の状態などによるものと思われるがその理由は俄かには決し難い。また表面には擦傷(研足か)もあるが図版からは視えない。これに対して新補部は、黒斑が比較的少なく黄斑部は澄んでいる。擦傷も少ない。

下にX線透過写真の一部を載せるが、該当部に照し合わせると、旧物に当る部分は斑文とは関係なく何段階かの明暗の階調差が見られ、補作部については、褐色の斑文部はX線をよく透過し、透明部は逆にあまり通していない。しかも旧部分に見られる様な複雑なものではなく、明快な二段階でしかない。

次に文様を表わす螺鈿部の新旧については、補作部の線影中には何物もみないが、旧物の線影中には黒色物質が埋まり(剝落するものもあるが)葉脈や鳥羽の線影りがくっきりと現われている。

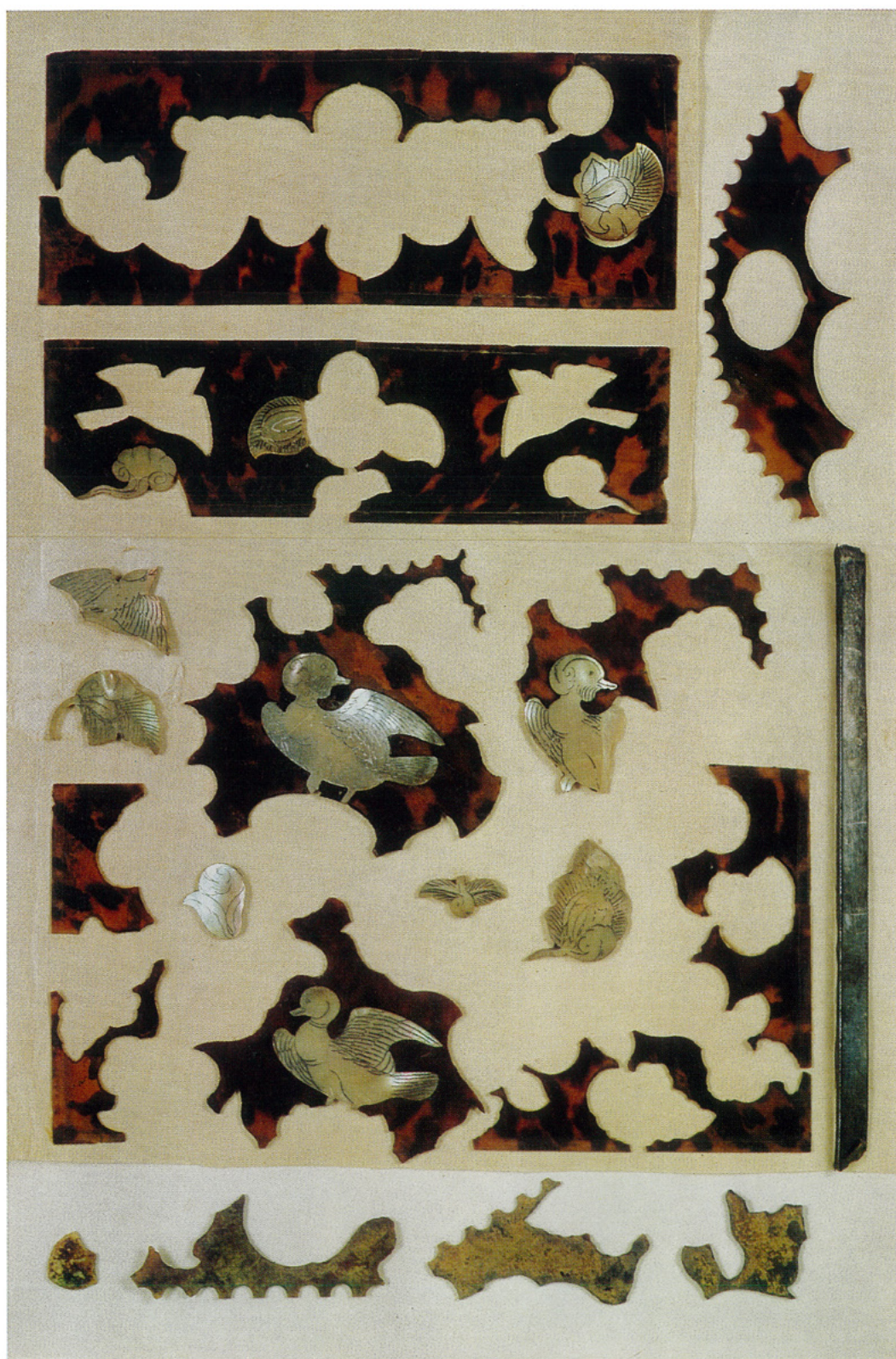
上方にある花芯、花卉を飾る赤色のものは琥珀であり、その裏面に朱彩を施している。琥珀については他の宝物の例から、旧物は暗赤色を呈し、罫割れの生じるものが多い。図版にみる様に鮮やかで、透明度の高いものは明治期に補われたものと見做される。

詳しくは本文一九頁参照

(木村法光)



瑠璃螺鈿八角箱(蓋部分) X線写真



2 瑇瑁螺鈿八角箱殘欠

瑠璃螺鈿八角箱残欠

図版のものは、前頁に示した八角箱の残欠で、明治の修理完了後に発見されたものの一部である。総計一二〇余片の内、瑠璃片の大小一八片と螺鈿片一二片、銀覆輪一片が写されている。

これらは、かつて整理されたとき任意に台紙に仮り貼りされたものである。これを近年行った残材調査の関連作業として、その一片一片を図面に描き、宝物とも照合した結果、前頁に示した瑠璃螺鈿八角箱の明治期に補作された部分に全て当て嵌まることが明らかとなった。詳細は本文一九頁参照。

左上方の長方形の一区は身の側面に当たるもので、上下顛倒していて、しかもそれは上下に分かれ別の部分に属するものである。次の一区は蓋の側面に該当するものながら、これも左右に分かれ別々のものである。その右方の歯車状のものは蓋中央の連珠文に接する部分であり、長径約一一㎝である。

瑠璃の厚さは〇・六乃至一・二㎝で、覆輪にかかる部分は少し薄く削られている。その表面には擦傷(研足か)が認められ、裏面には黄土が全面に塗布されている。図版の下の方の三枚は瑠璃の裏面を示している。

螺鈿は表裏を摺り合わせた貝殻の外側面を表に用いている。その厚さはやはり一㎝前後に揃えていて、貝の放つ光彩も、明治期に補われたものに比べて自ら古色を帯びたまろやかさがあり、その輪郭は垂直に截断されている。文様の毛彫り中には黒色物質が詰っていて、裏面には麦漆様接着剤のつくのが図版の下の方の左端のものから窺えよう。

図版の右端のものは合口部の銀覆輪で、長さ一四・七㎝あり、先端の〇・三㎝程を欠いている。表裏とも銀錆で覆われていて正倉院宝物にみられる独特な深い鼠色を呈している。厚さ〇・三㎝で接着剤などは見られない。

(木村法光)